研究論文

鳴門教育大学情報教育ジャーナル　2，65－75，2005

Videoconferencingによるイヴラインロウ小学校[1]の授業観察の試み

－意味世界の＜learning＞への気づきを求めて－

Observation of Teaching in Eveline Lowe Primary School Using Videoconferencing System:

Searching the World of Various Meanings of *'learning'*

山﨑洋子*

Yoko Yamasaki *

In this paper, through introducing my pilot e-learning lessons in 2004 at Naruto University of Education where undergraduate/postgraduate students observe some lessons in Eveline Lowe Primary School (=ELS) in London by using Videoconferencing system, I aim to make clear the process and way of taking various meanings of *learning*. The viewpoints I as the person offering the lectures intended were to show different teaching contents and methods in a children's classroom in ELS, compared with teaching practices in Japan, and to let the university students know some different ideas for teaching children. What do students notice or discover from the videos of the lessons? How do they understand the lessons to search for the meanings of *learning*? From the answers to these questions it is clear that students learned that there were various stances, ideas, and methods of education, and they noticed various meanings of learning which were framed by a range of considerations of learning environment surrounding the children.

[Keywords: Meanings world of learning, Videoconferencing, Topic plan/work, Eveline Lowe Primary School, Pilot e-learning lessons]

Ⅰ．はじめに－課題意識と本論の目的－

情報機器が急速に大学に導入される傾向にあるなか，とりわけ，教員養成の役割を担っている鳴門教育大学では，講義においても，情報機器を有効に使うことが求められ，旧態依然とした知識伝達の形式はやや勢いを失いつつある。たとえば，学生のニーズと講義目的との間に大きなギャップがみられるとの意見を前提に，ファカルティデベロップメントと称された取り組みがなされ，授業改善のための公開授業や学生による授業評価がなされているが，そこでも情報機器の有効な使用が重要視され，伝達に基づく暗誦スタイルに偏重していた講義を，それらの機器の使用によってカバーしようとする試みがみられる。それは，映像や音声を加えることによって，受講者の理解の深化を図ろうとする教授法の模索である。

しかし，学びの変容内実については未だ十分な検討が加えられていない状況下にある。なぜなら，高等教育機関の役割が，専門的知見に基づく批判的精神でもって知識の伝達と創造という知的営為に向かうことにあるとするならば，とりわけ教員養成大学の役割は，学ぶ存在が同時に教える存在へと変わるという二重性の対象化とその意味内容の解明にあるからである。とはいえ，これがいかに困難で遠大な課題であるかは，言を俟たないであろう。それゆえ，われわれがなし得るのは，それがたとえ遅々とした営為に見えようとも，些細な試行錯誤から得られた知見を整理し，何らかの基本的視点を導出すること，これを継続するしか途はない。

そこで筆者が構想したのは，外国の異なる教育実践との出会いを提供し，意味内容をもった 'learning'「学ぶということ」をリアリティある気づきとして生み出す授業である。ただ，現実には，外国の学校を訪問し，継続的に授業を参観することは制度的にも実質的にも容易ではない。そこで着眼したのが，近年，大学間で試みられているVideoconferencing System（以後，V-Systemと表記）を介すことである。これを使った授業は，既に本学内外で実施されているが[2]，外国の教育機関とのそれは稀であり，とりわけイギリスの公立小学校の教育実践の観察は，管見の限りでは初めての試みである。

本稿では，以上のような初発の問いと構想に導かれて実施した，本学での実験的授業，具体的には，ロンドン

* 総合学習開発講座（Dept. of Human Science for Integrated Studies）

の公立のイヴラインロウ小学校（Eveline Lowe Primary School, 1966-，以後，ELSと表記）の2年生（6－7歳児，日本の1年生に相当）の授業を，本学の学部3年次生対象の総合演習と大学院生対象の総合学習カリキュラム開発実践論の受講生および聴講生の計26名が[3]，V-Systemを使って観察した授業を取り上げ，多様な意味連関のなかにある‘learning’への気づきを描出する。ここでいう‘learning’とは，「教授－学習理論」に代表されるような行動主義心理学のいう「学習」論ではない。また，教育学のテクニカル・タームとして一定の位置を獲得している「学習」や「学び」という語でも的確に表現できない意味をもつ。ここではそれらのいずれにも回収し得ない，循環のプロセスのなかにある現在進行形的な，まさに「学びつつあること」を意味する概念として，暫定的に‘learning’を用いる。そして，そこで繰り広げられる「異文化としての授業」の観察記録やコメントをテクストとし，異なる事象との出会いがもたらす‘learning’の多様な意味内容・意味連関への気づきというモチーフを念頭におきつつ，「観察者の気づき」を，これまた‘learning’として再構成する。

したがって，‘learning’に含意されているのは，やがて教え手になってゆく学び手が，環境世界との相互関係のなかから意味を見いだし紡ぎ出していくプロセスの重視であり，同時に，人と人との交わりのなかの実践的関与，すなわち教育現実から得たテクストのコード化によってもたらされる実践的有意味性である。

Ⅱ．事前準備とシステム接続の全体的概要

さて，授業の具体的な内容に入る前に触れなければならないのは，この取り組みを背後で支えている人的・物的な環境についてである。ここでそのことに立ち入る理由は，このようなかたちの観察授業に必要な人的・物的サポートの内実を明らかにすることが，これからの遠隔授業やe-learningの可能性，限界，課題の明確化につながるからであり，またそれだけでなく，物理的・時間的制限を乗り越える‘learning’の方途の背景に多様な意思が存在することをつまびらかにすることが‘learning’の多義性に接近し得ると考えられるからである。

大別するならば，それらは相手校のELSサイドと本学サイドに分けることができる。前者には，二つの授業が研究プロジェクト[4]の一部に組み込まれたものであるため[5]，このプロジェクトへの参画についてELSに提案し同意を得ること，ELSにV-Systemを設置し接続可能にするための許可を得ること，それを介した授業参観の許可を得ること，授業観察回数，日程，サポート体制の交渉などがある。

最初にしなければならない事前準備は，(A)ELSへの暫定的な協力依頼と，(B) V-Systemを搬入するために実際にロンドンのELSを訪問した後の具体的な依頼，つまり授業を観察するクラス担任のスケジュールや技術者の助言を考慮に入れた具体的な依頼とに分けることができる。この二つの事前準備を時系列的に並べると，(A)としては，メールによる簡単な依頼（2004年4月29日）[6]，V-System選択と搬入許可，(B)としては，ELSの校長（Mr. Gary Foskett）と授業をするクラス担任教師（Miss. Wanda Margaret Clark=Mrs. Wanda Margaret Hamici, Assistant Headteacher= 教頭，本稿ではワンダと表記）らとの打ち合わせ（7月9日，10日），ELSの所属するサザック地区LEA(=Local Education Authority)へのELS担当の情報技術者（Mr. Khay Islam，以後，Khayと記す）によるIPアドレス取得手続きとV-System設置確認（7月9日，12日，13日），V-System設置および本学との試験的接続（7月19日[7]，20日），相手校での正式依頼（資料1）とアシスタント（Ms. Kimiko Shiga）との打ち合わせ（7月19日，20日）を挙げることができる。それゆえ，授業観察を迎える9月までには，実質的に約半年を要したことになり，その間の交渉回数も20数回を数えている。

もちろんのことながら，本学サイドの事前準備もほぼ同程度の期間を要している。相手校に搬入するシステムの選定と購入手続き[8]，試験的接続とその後の問題への対処など，多様な領域のスタッフの英知が結集しているとすら言い得るほど，V-Systemを用いた授業観察の準備には多くの作業を必要とした。例えば，7月19日と20日の試験的接続の結果，本学サイドから接続を試みるならばELSのV-Systemへの接続は可能であるが，本学のセキュリティの関係上，イギリス側からは接続できないということも判明した。また，情報送信が混雑し始める時間帯になると，接続が切断され，音声や映像の交信が切れること，室内の照度が高すぎると鮮明な映像が送られないことも分かった。しかし，試験的接続を再々試みた結果，意外にも，音声伝達のズレが少なく，映像も鮮明であり，日本国内の二機関間で通信しているような距離感やライブ感をもたらすことが分かった[9]。このようにして，半年の期間をかけたプロジェクトへの協力依頼と授業観察依頼の事前準備が終わったのである。

そして，いよいよ授業の観察に入ることになる。資料1（本稿75頁）でわかるように，事前に計画したのは，9月から12月までの期間の6回の授業の観察であったが，実際には，本学学生からの子どもたちへの質問日を2日間とったため，授業観察は4回となった。以下（表1参照）にまとめたように，準備段階を含めたV-Systemの接続は全8回，それに要した時間は26時間である。なお，接続時刻は，10月末までのサマータイムの期間では日本時刻の午後4時から7時ごろまで，11月からは午後5時から8時ごろまでであった。また，表1の鳴門教

育大側の専門家(P)とは，本授業担当者および本学での教員であり，ELS側の専門家(P)とは，クラス担任，クラス担任アシスタント，技術者，校長，通訳および技術アシスタントなどである。

表1　授業観察の概要

	月日 所要時間	内　容	参加者(N) (S)	 (P)	参加者(ELS) (C)	 (P)
事前準備	7/19 3h	試験的接続①		1		4
	7/20 3h	試験的接続②	4	3		4
授業観察	9/16 4h	試験的授業参観 ・Literacy	6	3	23	4
	10/12[10] 3.5h	・Mathematics	10	3	23	5
	11/16 3.5h	・子どもたちへの質問①	23	1	23	5
	11/26 3h	・Art & Music Design- Technology	21	2	24	4
	11/30 3h	・Science	24	2	24	4
	12/7 3h	子どもたちへの質問②	24	1	24	4

※ N=Naruto Univ. of Edu., S=Students, P=Professional Staff, C=Children，枠内の数字は観察していた者の人数を示している。

上記に示したLiteracy, Mathematics, Art & Music, Design-technology, Scienceといった授業内容は[11]，イギリスのナショナルカリキュラムの全体構造を理解していなければ，その授業がどこに位置しているかを十分に知ることはできない，という指摘もあるかもしれない。しかし，この授業観察では，授業の相異をまずは直感的に把握することを重視したため，イギリスの教育を支える背景や詳細については，予めプリントを配布し，必要に応じて学生が主体的にそれらを参照できるようにした。まさに，「はじめに実践ありき」のスタンスである。

また，双方の事情を考慮し（ELSの新学年は9月6日，本学の2／3学期の授業は10月4日から開始），授業観察は，10月12日，11月26日，11月30日の3回，授業観察ではないかたちでの子どもたちとの質問形式の交流は2回であった。なお，授業に際しては，前日あるいは当日朝に週授業計画（Weekly Plan）および当日の授業計画（Daily Plan），そしてトピック学習についての説明書類，計5－6枚がクラス担任からファックスで送付され，それを観察者にコピーして配布した。そして，当日には，イギリス時刻の午前8時半から20分間ほどクラス担任による授業内容の説明がなされ，授業終了後の午前10時15分ぐらいから30分間程度（子どもたちの休憩時間に相当），本学学生からの質問時間が設定される，という流れであった。それゆえ，ELSの授業担当者であるクラス担任の負担は，精神的にも身体的にも極めて多大であったことが窺われる。

では，本学サイドではどのようであったか，この点について簡単な説明を加えておきたい。本試みは，日英間の時差の関係上，受講生に授業として参加を強要することはできないという現実があり，それゆえ多少の配慮が必要であった。それらは，①授業観察は自主的・自発的なものにならざるを得ない，②規定の授業時には授業観察にかかわる内容の授業をする，③参観できない者のために，プロジェクターを介してスクリーンに映された情報をデジタルビデオテープに記録し，それを参観希望者に回覧する，④クラブ活動や所用のための，途中退出，途中参観，入退出には制限を加えない，⑤日本時刻では夕食時に相当するため，ELS側の授業の始まる前の時間帯に飲食することを妨げない，といった点である。また，授業は英語でなされているため，ELS側にスタンバイしている通訳と本学にいる筆者が随時，解説や翻訳を入れるということも必要であった。それゆえ，受講生への事前の説明では，こうした事情を説明した上で，学部生には，「学校観がどのように異なっているかをV-Systemを介した授業観察から見いだすこと」，大学院生には，「教師自身が構想したトピック学習の授業内容を観察することによって，カリキュラム編成能力がどのような点から生まれているかを見いだすこと」といった課題をそれぞれ提示した。

とはいえ，実際には，課題を意識して観察するというよりもむしろ，なぜこのような方法で授業をしているのか，なぜこのような授業内容なのかという，異なった学校文化に触れたことによる疑問が観察者全体に漂っていた。そして，その場は異次元からの映像に包まれた不思議な時空と化したのである。また，時間的・物理的な困難を抱えた授業であったにもかかわらず，次第に子どもたちに親近感を覚えるようになっていったことも，特筆に値する。こうして多様な意味を織り込んだ時空が，つまり，'learning'を生成する経験世界とでも言い得る場が作られていった。

Ⅲ. 'learning'の意味内容／意味世界
－授業観察がもたらした気づき－

では，ELSの授業観察によって学生は何かを気づき得たのであろうか。もしそうであるならば，それはいかなる内実をもっていたのであろうか。またそこには，どのような意味世界の様態が生まれたのであろうか。以下では，観察者の気づきの内実を描出するため，授業記録・コメント[12]をテクストとし，そこから気づきの内容を取りだして再構成する。なお，括弧内の文字はコメント者の属性を意味する。具体的には，学部生をS，院生をM，

そして現職院生をMTとそれぞれ表記し，その個人を弁別するため小文字を加えて記す。

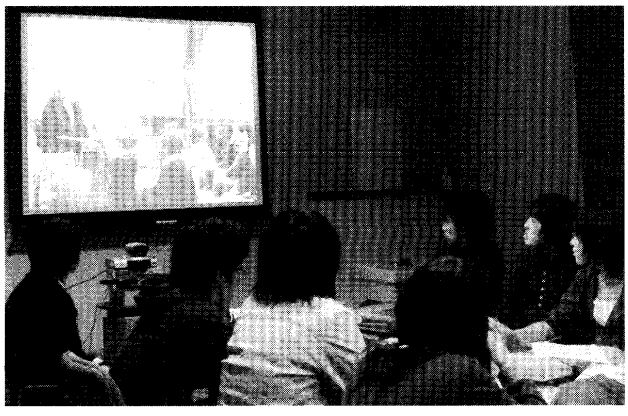
(1) 授業のスタイル・方法の相異への気づき

多くの受講生が，最初に驚いたと述べているのは，授業の際の物理的環境やスタイルについてである。

「教師の教卓がない」(Sa)，「教師がボードの前のソファに座って，その近くに子どもたちが座って話を聞くというスタイルに驚かされた」(Sb)。「子どもたちが学校に来て，地べたに座って本を読んだりしながらくつろぐ。まさに家庭のよう」(MTa)（以下，アンダーラインは全て筆者）。そして，このような授業スタイルに対して，「これは日本の幼稚園や保育所と同じ様子」(Sc)，「日本の教育現場で教師がソファに座りながら授業したとしたら，どのようになるだろうか」(Sd)，「日本では授業中に教師が座って説明しているなんて見られない光景である。あの教師はだいじょうぶかという批判があってもおかしくない。文化の違いだろうか」(Se)，「確かにソファに座って授業をするというスタイルは日本では中々考えられないことですが，実際に行っている授業自体には，なんら影響を与えていないように思いました」(Mc)といった様々な意見が出ている。授業スタイルの相異は，強烈な印象を与えたようである。

しかし，この驚きは次第に客観視されていく。というのも，そこに授業を楽しむ子どもの姿を発見するという状況が見られたからである。「ワンダ先生がソファに座って話をしているときも子どもたちが先生の話を真剣に聞き」(Sf)，「グループに分かれて活動しているときも，みんなすごく楽しそうだと思った。授業中は楽しそうといっても，遊んだりふざけたりして楽しそうというのではなく，自分たちに与えられた課題をまじめに楽しんで取り組むというかたちでした」(Sg)，「カーペットや床に座って学習する児童など，家庭の雰囲気の延長上に学校の存在がある」(MTb)。

撮影：山崎



撮影：大学院受講生　中原氏

実は，後で取り上げるように，こうしたコメントが，やがて，絶対視された日本的授業スタイルのイメージを解き放す道筋を生むことになるのである。

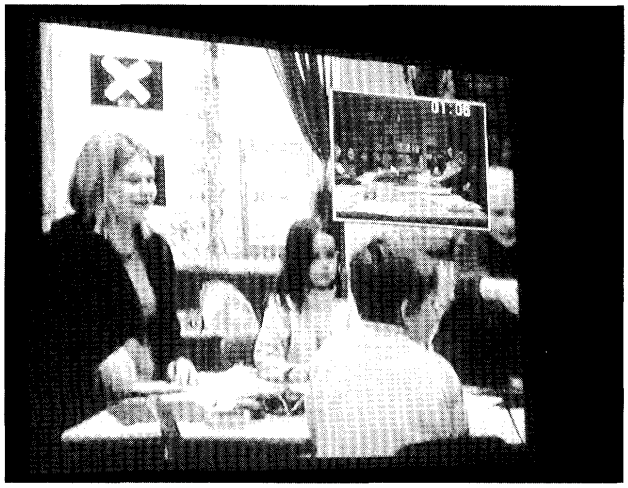
次に強く印象づけたのは，能力別（習熟度別）のグループ活動についてである。このクラスの一日の活動は，通常，下記（表2）にまとめたような流れになっているが，そのなかのグループ別の学習活動に対しては，多くのコメントが寄せられた。

「能力別の5グループに児童が分けられ，私たちの受けたことのない授業方法で授業が展開されていて，大変驚いた」(Sh)，「それは一見，やっていることは違っていて，ばらばらに見えるのですが，授業の課題やねらいというものは統一されていて，子どもに身につけさせたいものが授業を見ていて伝わってきました。例えば，私たちが参観した授業の時の課題は『宇宙』であり，各グループともに宇宙にちなんだ学習をしていました。・・・私はこのような教授法を今まで見たことがなかったのでとても驚きましたが，そこには教師がいて生徒がいて，しっかりと授業として成り立っていました。・・・子どもたちにとってより良く学ぶことのできる環境というのは，とてもたくさんあるのだ，ということを改めて感じました」(Sh)。「グループに合わせた学習形態をうまく取り込んでいると感じた。子ども達も他のグループを気にすることなく，自分の学習に集中する姿が伝わってきた。これは教師が個の特性をしっかり理解していると共に，教員間の話し合いや授業を手伝って頂けるボランティアへの人への説明が充分になされているからこそ可能であり，子ども達は力を付けることができているのではないかと考える」(MTb)，こうした学習方法は，「ワンダさんのいう，『子どもたちに学習の仕方を学ばせる』，『自立を促進させる』ということではないかと思った」(MTa)，「授業も習熟度別のグループに分かれていて，同じ時間でもやっていることは違っているという場合がある。その場合，子どもたちは他の子を気にすることなく，自分のしなければならないことができている。日本の子どもたちはこれができるであろうか」(Sj)等々。

これらを集約するならば，総じて，一人ひとりの子どもが机を前にして椅子に座り，教師と子どもが対面して授業する，いわゆる伝統的な一斉対面型の学習法が取られていないことへの驚きと，この学習スタイルのもつ意味についての気づきである。

＜授業観察の様子＞

撮影：山崎



撮影：大学院受講生　中原氏

表２　ELSの２年生（６-７歳児）の一日の活動

時間帯	活動内容	備考
8.45 - 9.00	登校 （大人の誰かと一緒に）	連絡ノートの提出と教室図書の返却。
9.00 - 9.10	担任：出席者確認 出席者数の報告と間食としてのフルーツをもらってくる（子ども２名によって）	以下のような挨拶を一人ずつにする。 ＜例＞ 教師：Good morning Billy, 子ども：Good morning Wanda)
9.10 - 9.20	授業① ・前日の授業の振り返り ・学習内容とグループ別の活動内容の説明	24人の子どもたちは，赤，青，緑，黄色，オレンジの５つのグループに分けられている。
9.25 - 10.00	・グループ別活動	担任とアシスタント教師が各グループを随時，指導する。
10.00 - 10.15	・全体で学習を省察	グループ毎の学習成果を子どもたちが説明し，全体で意見交換する。
10.15 - 10.45	音楽を聴きながら間食（りんご，バナナ，みかんのいずれかのフルーツ） （７－８分間） 運動場での遊び①	校舎への入退時には整列が義務化され，外ではその日の監視責任教員が全体の安全を確認している。各クラスの担任かアシスタント教師のいずれかも監督に出る。
10.45 - 11.45	授業② 授業①に準じた方法。	状況に応じてグループを再編する。
11.45 - 12.30	昼食	高学年（３－６年）に先立ち，低学年（３歳児から７歳児）がホールで食事をする。食事形態は，給食組とお弁当持参組があるが，子どもの性格などを考慮に入れて異年齢の食事グループが編成され，協力する習慣を身につけていく。また，各クラスの教師アシスタント全てがその補助に入る。
12.30 - 13.00	運動場での遊び②	監督体制は午前中と同様である。
13.00 - 15.20	授業③ 授業④ 個別，グループ別 （授業の方法は，授業①と同様である。）	週間学習計画を考慮に入れ，子どもたち一人ひとりの学習活動がその目標にまで達しているか吟味検討しつつ，学習活動の具体的内容を指示する。
15.30	下校	親や家族を確認し，一人ひとりの子どもを手渡し，解散する。 ※何らかの都合でこの時間帯に迎えにこられない子どもには，午後６時半頃までパートタイム職員によるホールでの特別活動（学童保育）が用意されている。

撮影：山崎

(2) 学習方法・内容の一体化への気づき

－生活／体験／学ぶということ－

では，「家庭に近い学校」(Sk)，「自分たちが体験したことのないスタイル」で，「授業がホームのような感覚で進んでいた」(Mc)という，そのような方法の学習内容についてはどのような気づきを得たのであろうか。

まず取り上げたいのが，「文化の違い」への気づきである。それは算数の授業の観察の後のことであった。

「日本では，分数を教えるとき，割合分数(後)，量分数(先)の二つの分数を分けて教えるのですが，イギリスでの授業は両方をごっちゃにして教えているようです。それは，英語では half dollar，quarter hour のように，日常的に量分数を使っているが，日本では量分数を使う慣習がないからかな，と思いました」(MTa)。「授業を見ていたある院生(MTc, Td)が，「割合分数と量分数とをごちゃまぜにして教えている」と話し，ワンダさんに確認すると，意識せずに教えているとの返事。確かに，・・・日本では２分の１時間や４分の１時間とは言わない。驚いたのが「４分の３」をイギリスでは「three quarter」と言うことです。(追加：three fourth とも言うそうです。three fourth の方がより口語であるとのこと。) quarter が３つと

いうことですね。quarterという感覚は日本にはないですよね。まさに文化に根付いている，という感じを受けました。このことだけでも,『イギリスの授業を見ることができて良かった』と強く感じました」(MTa)。

「理科の授業では,実社会の事象と結びつけた内容で授業を進めていることに関心を持ちました。このあたりも,日本でも教師は生活との関連を把握した上で子どもたちに教えていけるようにしなければならないと思います。そうすることで，算数（数学）や理科（化学・物理等）に興味や関心を持つ子供たちが増えていくと思います」(MTa)。

このようにイギリスの文化に導かれた学習内容は，実は子どもの実生活から立ち上がっている。それゆえ，高度な内容のものも取り入れざるを得ないのである。このことへの気づきは受講生に大きな影響を与えたようである。

日本の小学校では５－６年生で取り上げられる「宇宙」についての教育内容が，わずか６－７歳の子どもに与えられていたときのことである。「うーん，難しいことをやっている」とのコメントがしばしば出てきた。また，試験的観察の際の国語の授業では，お話の登場人物の性格(Character)の違いについて考えた後に，自分の性格が他の子どもとどう違っているかに着目して自分の顔の絵を描いていた。これに対して,「考えさせる授業だ」,「こんな高度な内容の授業は日本では考えられない」(MT,a,b,c,d,e)という意見が出てくる。「子どもの活動のなかで，自分を対象化し，自分の外にある環境(自然，友達，親，教師など)と比較しながら，違いを違いとして肯定し，自らの根っこを作っている」(MTe)との考察は，的確なものといえよう。なぜなら，髪，目，皮膚の色の違いも自らを特徴づける重要なファクターとして肯定すること，また個別性の発見の過程で自らの性格の良さを認めること，このことによって子どもは一人の人間として，また個人として，個性を伸展させ育っていくからである。

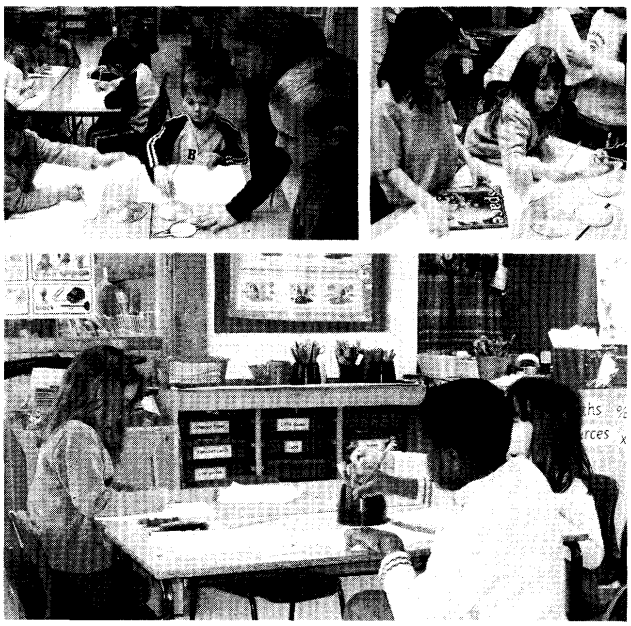
こうした統合化された高度な学習内容は，その方法との一元化によって成立している。受講生はこのことを学習内容の身体化によって知ることになる。

「子ども自身が自分の体を数として学んだり,ノートに鉛筆で数字を書いて学習するだけでなく，ハサミなどの道具，ナンバーマットなど体全体を使って分数を勉強」していた。・・・日本では低学年でもおはじきなどの教具を使って勉強をする。・・・しかし，イヴラインロウでは子ども達がその教具(数)になり，自分たちで数を学習することを行っていた。学びのとらえ方が日本よりも広くて，深い感じを受けた」。例えば，「ピザをわざわざ紙で作って切るという体験です。これは自分の家でピザを焼き，それを平等に家族に分ける過程として，日常の生活の中の数と学校で学ぶ算数の数の世界の境目を創らない工夫をしていると感じた。・・・・４人の子どもが立ってそれを半分に分ける学習では子ども一人の存在が一つの数として体を使って学習をしている」,「この様なイギリスの学習を日本ですると『数遊び』として受けとめられる可能性がとても高い。あの授業で本当に力が付くのか,学力が付いているのかと質問をされるだろう。また，ピザを作る時間があれば,『もっと問題を沢山解かしてください。』という声が聞こえて来そうである。文化や教育観の差などもあるが，私は授業を通して，子どもが学習する意味について，・・・学びとは何かを根本的に考える必要があると強く感じた」(MTb)。

このコメントは，日本の知的学力偏重に対する揶揄だけでなく,「学習の意味」や「学び」への根元的な問いが,観察者の内面に湧き起こりつつあるいうことを暗示している。すなわち，ここで彼が気づいたのは,「学ぼうとする意思」,「学んでいる状態とその環境」,「学んだこと」,「学びつつあること」といった，教育行為によって生成される場と時間の重要性についてであり，同時にそこで生まれた＜学び＞の全体性についてである。

では，この契機は，どこにあったのであろうか。

＜グループ活動の様子＞



撮影：山崎

(3) 'learning' をめぐる連関性への気づき

－子ども，教師，ともだち／'to learn','to share'－

観察者が,「学びとは何かを根本的に考える必要」があると気づいた背景には，映像を通して伝わってくる子どもたちの生き生きとした姿がある。初めは,「何の教科の授業かがわかりませんでした。(教科という表現の仕方も間違っているかもしれませんが。)子どもたちは５つのグループに分かれていて，グループごとに音楽や図工や算数をしていて，どこをどのような視点から見ればよいの

かということをつかむのに大変時間がかかりました」(So)という状況であったにもかかわらず,「みんな『学ぶ』ということを強制的であるとか,嫌だとは思っていませんでした。むしろ,自分たちの成長のためであり,学力だけでなく,内面性においても豊かに育っているなと感心しました」(Sk),「先生の目が子どもにきちんと届いていた」(Sl),「教師が一人ひとりをきちんとみている」(MTa,b)と語っている。

また,その背後にある教師の教育観や学習観についての気づきも現れている。「授業全体の流れも,初め全員で集まって,前時の振り返り,それぞれのグループの復習や体を使ったゲームから入り,各グループの活動を行い,また,最後に全員で集まって,今日の疑問や学んだことを共有する展開になっていた。個々に学習することが基本にあるのですが,それをつなげることを教師自身も大切にしていた」(MTa)。つまり,子どもの諸活動から有意味性を的確に抽出し,そこに喜びや楽しさが存在していることを観察しているのである。言い換えれば,子どものいる場が多様な願い,意図によって成立している,と気づいているのである。これは,いわば「子どもをめぐる時空が多様な意味の織りなす経験世界である」ことの自覚へのステップ,ということができよう。なぜなら,知識を統合化しつつある子どもを取り巻く状況に,考察の目が的確に向けられているからである。

このように観察をすすめるなか,一元化された授業方法・内容が子どもの成長にいかにつながっているかを観察者が認識し実感し得たのは,子どもたちへのインタビューからであった。

第一回の質問日は,クラス担任が不在であったため,とりわけ教師の意識が介在しないかたちとなり,子どもたちの素直な声が得られた。

それは「学校へは何のためにくるのですか」という質問に,わずか6－7歳ながら,全員の子どもが「学ぶため」,「分からないことを習いに来るため」と答え,「太陽からエネルギーがどうつくられるかを知りたいから」,「応急処置のできる救急隊員になりたいから」,「何かを分かち合うため(to share)」,「他の子どもがひとりぼっちの時にどうやったらそれを助けてあげられるかを学ぶため」,「大人になっても学ぶことはなくならないので,今,いろいろなことを学ぶ」(Se,f,g,h, MTb)と答えたからである。

しかも,その答え方が,「きちんと文章で表現されて」(MTa)いたことも印象深かったようである。「日本では,大学生になってもきちんと先生の質問に答えられない人がいます(自分自身も気をつけなければ・・・)。このあたりは日本でもしっかりしていく必要があると思いました」(MTa)と自戒を込めて述べた者もいる。そして子どもの返答から,「子ども自身が,学校とは勉強を教えてもらうところである以上に,自分で何かを学びとって行くところだと捉えている」(MTb),「自分の学びが今の生活に,そして自分の人生につながっていることを意識している発言に驚いた」(MTb),「子どもたちは将来のために学びたいという気持ちがあり,生きる力が感じられる」(Sj)と述べている。

これらの多様な気づきを集約するならば,①家庭的雰囲気をもった確かな学びを促す学校であること,②子どもの知的・社会的・精神的発達をめざす,まさに子どもの生活から立ち上がった「子ども中心の学び(Child-Centred learning)」の活動の場と時間が保障されていることの2点である。つまり,教師自身の手によって編成された授業の観察によって,学校は子どもをからっぽの器と見立てて何かを詰め込んだり,記憶を強いたりするのではなく,'learning', 'to learn', 'to share'の主人公として自分の可能性を喜々として伸ばすように援助する場所,という担任教師の教育信念が理解されたのである。

それゆえ,「学びつつあること」,つまり'learning'をめぐって,多様な意味が相互に関わり合って成立していることへの気づき,そしてまた逆に,多様な意味連関の

＜子どもへのインタビュー①＞

撮影：大学院受講生　中原氏

撮影：大学院受講生　中原氏

※ワンダの「心身のリラックス」の指導に従って,子どもたちと日本の観察者が身体を動かしている様子。

なかでこそ，人は‘learning’の状態に至る，という意味世界への気づきが，観察者の意識に生まれ始めたのである。この意識変容は，端的に，‘learning’の意味世界の多様性と多義性に対する自覚への第一歩といい得る様態といえよう。

Ⅳ．おわりに－意味世界の生成に向けて－

以上，V-Systemを介したロンドンの公立小学校の授業観察を紹介し，観察者らがどのような形態と様態をもった‘learning’に気づいていったかを考察してきた。それは端的に，現在進行形的な意味を持った学び概念と集約することができるが，しかし，そこで切り取られた映像には，それが他者から与えられた映像であるがゆえに，観察者の主体性は存在しない。たとえば，授業が展開されている教室がどのようになっているのか，カメラで撮影している以外の場所でどのようなことが起こっているのか，といった情報は，瞬時には入ってこない。したがって，目に入ってくる映像は，他者によって切りとられた部分事象に過ぎない。それゆえ，そこには製作された映画やテレビに接している時の感覚とも，また実際の授業参観の時の感覚とも異なる感覚が生まれる。しかし，軽視し難いのは，双方向性ゆえにリアルであるということである。ネットが切断されることもあるが，そこにもライブ中継のような緊張した感覚が生まれる。こうした限界をどのように捉えるか，またこれをどう克服するか，ということになれば，現時点では留保せざるを得ない。

しかし，逆に，こうした限界性ゆえの洞察可能性も潜在する。なぜなら，参観授業では見逃すことも，切り取られた映像では顕在化することが多々あるからである。推察するに，また経験則ではあるが，こうした状況での気づきの積み重ねが，客観的思考を促し，省察をもたらし，多様なかたちをもった学びの現実認識へと歩を進めていくことになるように思われる。「気づき」という営為の総体は，暫定的に，「自己の前理解との違いの感知」，「意味への萌芽的気づき」，「意味内容をもった何ものかへの確かな気づきとそれらの連合化・統合化」，「意味内容の総体の転移」，「意味世界の自覚」といった意識状態であるということができるが，そこに通奏低音のように流れているのは，人間という存在に興味や関心を示すある種の自然性への憧憬的態度である。それゆえ，異なった事象・世界へと誘われる際には，自分とは異なった人間へのヒューマニティ溢れる眼差しと自己を拓く柔らかな自然性が不可欠になる。そして，それが先入観や前理解を懐疑しつつ差異を受け入れる「構え」となるのであり，それこそが人間がなにものかを掴み取っていく際の基本なのである。もし，そうでなければ，聞き取ることすら困難な子どもの英語会話に向き合うことは難しく，大学の授業としても成立しない。受講生らが，自らの私的な時間を割き長い時間を要する観察に参画したこと，このことが既に‘learning’の意味世界を享受していることの紛れもない証左であり，この意欲的かつ知的欲求に内在する意味は多大である。

ただ，たとえこうした前提や状態を了解したとしても，可能な限りリアリティを感じつつ，喜びを享受するなかで効果的に授業を観察すること，また，その事象に内在する意味に目を向けること，こうした状態に至るためには多少の配慮と工夫が必要である。

その重要なポイントが授業観察日の設定である。可能ならば，一つのトピックが展開される授業を継続的に観察することが望ましい。たとえば，本学サイドの授業を集中講義あるいは集中演習のようなかたちに組み，相手校に集中的観察の依頼をするということを試みるのも一つの方法である。これは高等教育システム上の問題でもあり，まさにファカルティデベロップメントの仕事に属する。そしてまた，こうした授業を学生とともに共同研究プロジェクトとして立ち上げることも選択肢としてあげられよう。もし，そのような構想が実現するならば，現実社会を生きる一人ひとりの人間の‘learning’が，多様な意味連関の絡まる中から生起し生成されること，このことに気づき得る機会が少しなりとも増すであろう。これこそが協同的教育研究環境が保障され，専門的英知の結集とさまざまな専門家の動員が必要とされる所以である。

ただ，こうしたいわゆるネット社会の加速度的伸展に際しては，可能性だけに目を向けるわけにはいかないことについても言及する必要がある。なぜなら，情報機器が孕む物質的・経済的問題は，e-learningにつきまとう大きな問題だからである。端的にそれは，物象化世界に投げ込まれた人間の実践的行為の問題と言い換えることができる。近年，顕著にみられる「はじめに情報機器ありき」というメーカーの意識とそれに禁欲性を働かし得ない消費社会や市場の動向には，慎重に検討せねばならない重大な問題がある。この点については，稿を改めて検討する必要がある。

それゆえ，課題は多々あると言わざるを得ない現実が厳然とあることを一方で認識しつつ，新しい教育実践の模索によって得られた可能性と課題を提示し，ひとまずここで筆をおくことにしたい。

謝　辞

本プロジェクトおよび授業への協力者は，日英の教育専門家および情報技術の専門家だけでも10数名に及ぶ。また，本授業に際しては，筆者ゼミ所属の院生諸氏の助力によるところが大きい。さらにまた，受講生の存在は

授業成立上の絶対的要件である。本授業では，こうした人々の多様な興味と関心，意欲的かつしなやかなモチベーションが，まさに「学びつつある人々の織りなす意味世界」を作り上げていった。それゆえ，本試みは，筆者にとっても豊かで意味ある最も記念すべき授業のひとつとなった。ここにこのことを記して，本プロジェクトおよび授業にかかわってくださった全ての人々に対して衷心より感謝の意を申し述べたい。

Acknowledgement

I would like to thank to all my colleagues, Mr. Gary Foskett, Headteacher, Mrs Wanda M. Hamici, Class teacher and Assistant Headteacher, Mr. Khay Islam, Internet Technician, Ms Kimiko Shiga and Ms Yuka Inoue ed., Assistants and Translators, in London, and Prof. Naoto Sone, Prof. Nobuhiko Fujihara ed., and all the students in my lessons in Naruto University of Education. It was a very stimulating/enjoying/intellectual activity to try this big project/these pilot lessons for me. Without the help of all my students/colleagues both in London and Naruto, these interactive experiences and multiple intelligences, and working opportunities of e-learning might not have been as rich as evidenced here.

撮影：山崎

撮影：山崎

※上の二つの写真は，ELS の子どもたちによる二つのクリスマスソングのプレゼント後で，本学３年次生らが「サンタが町にやってきた」を日本語と英語で歌って返礼している様子である（交信最終日の 12 月 9 日）。

付　　記

本稿は科学研究基盤研究 C(2)「総合的な学習における学びの連関性を強めるカリキュラムの開発と評価に関する研究」（研究代表者：小西正雄）の研究成果の一部である。本研究における研究分担者としての筆者の役割は，現実社会を生きる子どもの学びが全人的発達へと結実するよう，「総合的な学習」を教育哲学，教育方法論の観点から再検討することにある。

注　　記

1．イヴラインロウ小学校は，1960 年代の進歩主義教育を実験的に推進するために建設されたオープン・プランの学校である。同校の教育理念，校長の学校観，子ども観などの詳細については，次の論文および報告書を参照されたい。

山﨑洋子，ゲーリー・フォスケット「進歩主義教育における『子ども中心の教育（Child-Centred Schooling）』の理論と実践－イヴラインロウ小学校の提起するもの－」，鳴門教育大学『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）』第 18 巻，平成 15 年，pp.133 - 147.

山﨑洋子「イギリス公教育におけるイヴラインロウ小学校の先駆性―全人的発達の可能性を求めた歴史と現在―」，鳴門教育大学『鳴門教育大学学校教育実践センター紀要』第 18 号，平成 16 年，pp.59 - 70.

山﨑洋子「人間の全体的発達のための視座と枠組み」鳴門教育大学教科教育研究会編『総合的な学習の時間における教師の実践力育成のためのカリキュラム開発に関する研究』（平成 12 年度～平成 14 年度科学研究費補助金　基盤研究 A(2)研究成果報告書）2003 年，pp.3 - 13.

ゲーリー・フォスケット講演記録「総合学習と教科教育にもとづく子どもの成長・発達－ロンドンの公立小学校の実践報告」同書，pp.263-281. Gary Foskett, Assessig the Strengths of Eveline Lowe Primary School, Ibid., pp.282-286, Gary Foskett, Key Issues for a 3 Dimensional Curriculum, Ibid., p.287, Gary Foskett,Futher Key Concepts for a Child-Centred Curriculum, pp.287-290.Yoko YAMASAKI, Gary FOSKETT, Study on Child-Centred Schooling and Progressive Education in Eveline Lowe Primary School: In order to Development Integrated Studies in Japan, Ibid., pp.291-304.

なお，同校についての詳細は，ホームページ http://www.evelinelowe.southwark.sch.uk/ を，同校と鳴門教育大学院生との交流については，山﨑洋子「教育思想史研究と『子どもの笑顔』」（鳴門教育大学国際交流機関誌第２号『波紋』，2003 年 7 月 22 日）http://www.

naruto-u.ac.jp/shyomu/hamon-002.pdf, 同校の年次報告書 2000 − 2001 http://www.evelinelowe.southwark.sch.uk/Views/Reports.htm Governors Annual Report to Parents 2000 − 2001, 年次報告書 2002 − 2003, Governors Annual Report to Parents 2001 − 2002 を参照。

2．日英の交流授業の事例には，Japan Festival Education Trust (=JFET, がある。http://www.japanuklive.org/ 参照。)

なお，筆者らは2003年度から大学院の教育実践研究方法論Ⅱの授業において，本学と京都大学高等教育開発推進センターとの間で，遠隔教育システムを利用した連携演習授業を試行し（授業担当者：石村雅雄，三宮真智子，山崎洋子），2004年度に同授業の受講者の学習行動とハード及びソフトの条件整備について研究することを目的にした学内プロジェクトを立ち上げて研究している（研究テーマ：遠隔教育システムを用いた学生主体の大学間連携授業の試行とその分析，研究代表者：山崎洋子，研究分担者：石村雅雄，三宮真智子，曽根直人，谷村千絵)。

3．受講生の内訳は，学部3年次生20名，ストレート院生1名，現職教員院生4名，留学生1名である。

4．ここでいう研究プロジェクトは，平成16年度の時限科研の一環としておこなったものである。(科学研究費基盤研究C(2)，研究課題名：総合的な学習における学びの連関性を強めるカリキュラムの開発と評価に関する研究，研究代表者：小西正雄，研究分担者：村川雅弘，山崎洋子，西村　宏，近森憲助，藤村裕一，太田直也)

5．V-Systemや授業観察・記録に必要な備品の購入，人的サポート体制に関しては，上記注4にあげた科研費から部分的に供出している。

6．筆者がこのプロジェクトへの協力を依頼したのは，2004年4月29日である。その依頼に対して，イヴラインロウ小学校の校長であるフォスケット氏は，次のように協力的な返答をしている。“・・・・I'm very pleased you are making progress with the video-conferencing and e-learning project. It's good that you have been given the funding you need. I think it's going to be very interesting if we can help teachers and trainee teachers in both England and Japan to learn from one another. I hope it may also be possible in the future for children to take part in videoconferencing - obviously with the help of translators. We should really try to do some pioneer work with this technology.”(筆者宛メールより抜粋，Thursday, April 29, 2004 8:41 PM)

7．この試験的接続は予め計画していたものではなく，筆者らがELS側で設定・接続していた時に，たまたまそれを知った曽根氏によるELSへのアクセスの結果であった。

8．機能，価格，サポート体制，重量，運搬可能性などを考慮に入れ，最終的に選定したのは，Video-conferencing System HiView1000/2000 Seriesである。選定に際しては，本学教員（曽根直人氏，藤原伸彦氏）の助言協力を，購入手続きに際しては本学契約係職員（米田雅信氏）の助言をそれぞれ得た。なお，運搬に際しては，筆者への備品長期貸し出し手続き終了後，筆者渡航時（2004年7月8日）に手荷物として持参し相手校へ搬入した。

9．なお，本学サイドのVideoconferencing Systemとしては，筆者が2003年度に購入依頼した機種，Sony PCS-1600（情報センター長室に設置）を用いた。

10．この後の授業観察日が11月16日になったのは，ELSのハーフターム（10／23 − 31）に由来する。なお，上記科研研究の一環として，本学では第3回日英総合学習セミナーを開催し，そのゲストスピーカーとして当該教師を招聘した（10月23日− 11月2日)。講演原稿は2006年3月の成果報告書に収録される予定である。

11．イギリスの義務教育期間（5歳から16歳）は，4つのKey Stageに分けられ，Year 2（6 - 7歳）までをKey Stage 1と称し，その段階では，English, Mathematics, Science が Core Subjects, Design and technology, Information and communication technology (ICT), History, Geography, Art and design, Music, Physical education が Non-core foundation subject とされる。その他に，ELSでは Religious education (RE) Personal, Social and Health education (PSHE) も重要な学習とされ，また原則的には中等学校の学習内容である Modern foreign languages としてのフランス語を6歳から教えている。

12．ここで対象とするテクストは，学部生及び大学院生のレポート，ブログ上での授業記録などである。(http://viewtleaf.exblog.jp/1379079#1379079_1, http://viewtleaf.exblog.jp/1163310#1163310_1, http://viewtleaf.exblog.jp/1320939#1320939_1, http://viewtleaf.exblog.jp/1415776#1415776_1）を参照。

なお，引用に際しては，明らかに変換ミスであると思われる字句の修正と読点をカンマに統一することに留め，十分に表現し得ていない箇所もそのまま引用した。

13．ここで列挙した意識状態については，別途，精緻に議論する必要があるが，本稿ではこの点を指摘するに留め，次稿に期すことにする。

（資料１）

20/07/2004

Proposal

Proposal for research project between Naruto University of Education and Eveline Lowe Primary School.
I, Yoko Yamasaki, professor from Naruto University of Education, propose to work with Eveline Lowe Primary School in my study of the development, assessment and curriculum of integrated studies, using video conferencing system between Eveline Lowe Primary School and Naruto University of Education.

Purpose of the project:

- To observe and analyse how children in a child-centred school can develop their creativity in the classroom, focusing on a year 2, over the certain period of time.
- To find out the ethos within a child-centred classroom.
- To find out how an experienced teacher in practice creates an inspiring and interactive curriculum.
- To find out how an experienced teacher in practice organizes the curriculum.
- To see the actual lesson live and discuss the findings interactively with a teacher, using a video conferencing system.

Conferencing Plan:

16th September : Focused on Literacy
12th October : Focused on Math
26th November: Friday Assembly
16th November: Art, Music, and Design Technology etc
30th November: Science
October: Christmas Performance